

## 京都府金剛院執金剛神・深沙大将像の成立—造像背景の再検討を中心に—

島田 和（慶應義塾大学）

京都府金剛院の執金剛神・深沙大将像は、銘記から鎌倉時代初期に活躍した仏師快慶の作であることが知られる。執金剛神と深沙大将を一对とする典拠は明らかではなく、これを記す唯一の同時代史料『南無阿弥陀仏作善集』の作者、俊乗房重源による考案とされてきた。『南無阿弥陀仏作善集』は重源が自身の生涯の作善を記録したものであるが、同一の尊像構成をとる作例2件のうち、高野山金剛峯寺所蔵作が、近年の像内銘記と納入品の発見により同史料記載の像に該当することが判明した。一方、記載されていない金剛院像は重源の作善に含まれない可能性が高い。従来金剛院像の造立にも重源の関与が有力視されてきたが、本発表では金剛院像の考案者を再検討するとともに、造像契機や制作年代について試案を述べる。

金剛院像と金剛峯寺像との間には、納入経の有無や図像的典拠など造立意図に関わる明確な相違が認められる。特に金剛院の執金剛神像は著名な東大寺法華堂同像を直模しており、図像の選択に初発性が認められる上、背景には東大寺教学復興の意図がうかがえる。

執金剛神と組み合わせられた深沙大将は玄奘三蔵の求法譚に登場することで有名であるが、その容姿を特徴付ける髑髏瓔珞に関わって、玄奘三蔵が前世数度にわたり砂漠で深沙大将に旅を妨害されていたという伝承が見出される。その後深沙大将が改心して玄奘は砂漠を渡り得たというが、『六十華嚴』と同じ仏駄跋陀羅訳とされる『仏説観仏三昧海経』には、執金剛神が人を喰らう鬼神を改心させる物語が説かれている。金剛院像考案者はこの鬼神と深沙大将を重ね、執金剛神が深沙大将を改心へと導いたために玄奘の渡天が成った、つまり仏法東漸の真の功労者として執金剛神を描き出そうとしたのではないだろうか。典拠となった経典が華嚴宗関連のものであること、東大寺教学復興に関わる意図が想定されること、当時の法華堂は尊勝院の配下にあったことから、発表者は金剛院像の造像考案者として東大寺尊勝院院主弁暁が最も相応しいと考える。さらに造像契機として、弁暁の唱導資料から関与が確認される安元2年（1176）発願・建久8年（1197）総供養の八条院自筆金字大般若経書写事業を提示し、また丹後国金剛院への安置はこの事業を取り仕切った丹後守藤原長経の差配によったと推測する。当時の丹後国は八条院の院宮分国であったとされており、また金剛院の寺号「慈恩寺」は、玄奘三蔵が天竺より持ち帰った大般若経の訳出につとめた唐の大慈恩寺を想起させる。以上のことから制作年代については金剛峯寺像に先行し、快慶の「巧匠丸阿弥陀仏」銘の初出を踏まえ、上限を建久3年、銘記の筆跡の類似が指摘される諸像の制作年代等を勘案し、下限を建久6年と推定する。権威ある画像を写した模像を多数制作し「巧匠」の称号を冠した快慶の生涯において、その最初期の事蹟として金剛院像を位置付けたい。